



落語家

笑福亭羽光氏

プロフィール

1972年生まれ、大阪府高槻市出身三島市在住。お笑い芸人、漫画原作者を経て2007年笑福亭鶴光に入門。2013年第12回さがみはら若手落語家選手権優勝、第24回北とびあ若手落語家競演会北とびあ大賞。新作落語『ペラペラ王国』にて2018年渋谷らくご大賞創作大賞、2020年NHK新人落語大賞受賞。2021年5月真打昇進。

世代を超越し融合する 新作落語の創造性

大阪出身で、三島市在住の落語家・笑福亭羽光氏。2020年、NHK新人落語大賞を見事受賞。今年(2021)5月に真打に昇進し、7月の三島での真打披露公演を控えた羽光氏に、創作についてや三島の落語会について話を伺った。

露興行の三島版みたいなものですね。落語会は、個人でもやるし、一門でもやるし、一門と関係ない人とやることもあるし、全然違うジャンルの人とやることもあります。ネタは舞台上から決めることが多いんですよ。だから「寿命無」をやりますよとあらかじめ書いておく時もありますが、たいていは舞台上からお客さんの顔を見て、お年寄りが多いとか、若い人が多いとか見ながら合ったものを話します。演目のストックは古典落語50席、新作落語100席ぐらいですね。

落語家さんは、普段どんなお仕事をしてますか？

新作落語がお得意と伺っています。新しい話はどうに生まれてくるのでしょうか。

僕は34歳の時に、お笑い芸人と漫画原作者を挫折して落語家になりました。落語家は階級が「前座」「二ツ目」「真打」と分かれています。前座は修行期間です。寄席という毎日落語をやっている劇場みたいなところに通って、舞台進行や師匠方にお茶を出すといった修行を4年間やります。それが終わると二ツ目という身分になります。寄席に毎日通わなくてもよくなり、自分で仕事をできるようになります。二ツ目と真打の活動内容は大体同じですが、色々ところで落語会をやったり、寄席に出演したりして生活しています。

メタフィクション、メタ構造が僕の得意とするテーマです。物語が物語を包んでいる構造のことです。SFの用語で、僕らの世代でしたら、筒井康隆さんの小説によく見られます。クリストファー・ノーラン監督の映画『インセプション』も夢の中に何階層も入っていくというメタ構造のストーリーです。

落語会は、老人ホームや学校などと呼ばれることが多く、小さな喫茶店でも居酒屋でも、企画いただければどこでも行きます。ざぶとんと手ぬぐいがあつたらできます。7月18日の三島市民文化会館の公演は、6月中旬から東京で開催中の真打昇進披露会です。

自分はバスで新宿まで行くことが多いのですが、東京に非常に近い感じがします。それでいて自然も豊かで、これからは若い人が増えたらいいですね。自分には縁もゆかりもない土地でしたけれども、非常にいいなと思っています。今回の文化会館での公演を応援してください。市役所の方からも、若い人に文化のパワーを感じてほしいという気持ちを感じられます。

落語の弱点を逆手に取った『ペラペラ王国』

そこから着想を得たのが、NHK新人落語大賞を受賞した創作落語「ペラペラ王国」です。見ている人には話し手である僕しか見えていないので、一人で演じる落語の弱点を逆手に取って、僕が若者になったりお年寄りになったりど役を演じ分けていることも全て虚構である、この世界が存在していない非現実的な世界かと現代的な危うさに挑戦した作品です。



三島落語会のチラシ

三島落語会について教えてください。

三島に移住したのが二ツ目になった後の2012年です。妻の実家のある三島と東京を行き来しながらの生活になりました。落語会は、最近ではコロナ禍もあり、オンラインスペースな「みしま未来研究所」を会場にしています。大体2ヶ月に一度くらい、ゲストの落語家を呼んで開催しています。子供の常連さんが「落語がはじまつちゃー」と駆けつけてくれることもあってうれしいですね。

演劇の人とは役に対するアプローチが全然違うんですね。演劇であれば、ある人物になりきると思いますが、僕ら落語家は大勢の人間を演じますので、その人物になりきりません。役を深く掘り下げずに典型的にやるということですね。

エンターテイメントとして、子供を受け入れた方が広がると思います。子供さんがいる日は「人情斬は重いかな？」とも考えるんですが、場の緊張感を感じるとか、案外真剣に聞いてもらえますね。そういうのも含めていい経験になるかなど。

落語が育む想像力

こんな、衣装もつけない、カツラもかぶらない人がやることの世界観を、想像力を働かせて理解することはとても大事だと思います。いじめをなくしましょうと偉い人が言っても全然心に響かないですが、ストーリーの中に入っていたら、潜在意識の中に組み込まれると思います。

最近どんな活動をされてますか？

コロナ禍で寄席も休みの時期がありましたので、空いた時間は作品作りにあてていましたね。東京の寄席も席数を50パーセントにやっています。オンラインもありませんが、どれだけ伝わるのかという課題もあります。

7月の三島の真打昇進披露公演では、自分と鶴光師匠の高座のほか、「披露口上」があります。黒紋付きで行う昇進の挨拶のようなものですが、寄席以外でやるのは珍しく、おめでたい雰囲気があります。三島市長はじめ三島ゆかりの方にも登場していただきたいなあと思っています。

三島にはどんな印象がありますか？

自分はバスで新宿まで行くことが多いのですが、東京に非常に近い感じがします。それでいて自然も豊かで、これからは若い人が増えたらいいですね。自分には縁もゆかりもない土地でしたけれども、非常にいいなと思っています。今回の文化会館での公演を応援してください。市役所の方からも、若い人に文化のパワーを感じてほしいという気持ちを感じられます。

これから、お年寄りとお若者の融合が大変な時代だと思います。その中で、落語は古いものと新しいものが融合できる力を持っているのではないのでしょうか。

「ペラペラ王国」は、こんな辛い現実も神様が作った夢と思えば、気持ちに楽になるんじゃないかというのが作品に込めたテーマですので、落語を超越したメッセージは、若い人にもお年寄りにも伝わるようにしてこれからもやっていきたいです。

三島市制80周年・文化会館開館30周年記念
笑福亭羽光 真打昇進披露公演



2021年7月18日(日)14:00開演
三島市民文化会館 大ホール